OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上代語の名詞抱合について
Author(s)	衣畑, 智秀
Citation	語文. 2010, 92-93, p. 34-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69135
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

上代語の名詞抱合について

衣畑智秀

一　はじめに

遠く失われてしまった言語の特徴を推測するのに、現在使われている系統関係のない言語の特徴を利用することがしばしばある。その特徴が深く文化に根ざしたものならば、文化的・言語的系統が異なる言語を利用するのは必ずしも有効とは言えないだろう。文化の違いはあまりに多様であり、共通した特徴がそれらに備わっているとはかぎらないからである。また、単語の形も、系統関係がなければ二つの言語はあまりにも違っている。もし、二つの言語の基本的な単語に、（一定の音韻法則から導かれる）顕著な形態的類似が認められれば、それはそれらが同系の言語である証明になる。よって、系統的に異なる言語によって、失われた言語の形を推測することはできない。しかし、言語の持つ規則については、事情が違っている。系統的に全く関係のない言語が共通した文法規則を持つことは、しばしば観察されるからである。比較言語学において、規則の類似性が、言語の系統の証明に使用できないのはそのためである。

たとえば、動詞派生名詞とその項名詞による複合を例に取ってみる。派生名詞が他動詞の場合、動作主を表す主語とは複合することができない（夫が皿を洗う∨＊夫洗い）が、受動者となる目的語とは複合することができる（皿洗い、影山一九九三参照）。このことは、日本語と系統関係のない英語でも成り立つ（＊husband-washing vs dish-washing）し、日本語や英語とは全く異なる操作をしているように見える「抱合語」（Sapir 1911）と呼ばれる言語にも見られる特徴である（Mithun 1984, Baker 1988, 2001）。抱合とは、動詞を派生名詞化せずに、名詞を動詞と直接複合する操作を言うが、ここでもやはり動作主が動詞に抱合されることはない（赤ん坊が肉を食べる∨waha'-wahra-ke'［3 Sg-肉-食べる］vs ＊waha-wira-ke'［3 Sg-赤ん坊-食べる］／イロコイ語族モホーク語，Baker 2001 より）。

さて、現代の日本語においては、モホーク語のように、動詞を派生名詞化せずに、直接名詞と複合させることはできない（山田さん殺し（の犯人）vs *（犯人が）山田さん殺した、*山田さん殺せば）。しかし、宮岡（二〇〇二）によると、上代日本語では、このような抱合が生産性を持っていた可能性があるという。

現代日本語は、名詞抱合的形成の凝固した複合動詞（上掲「名ヅケル、目ザメル」その他）とみるべきものがあるとしても、上記のような言語［引用者注…フリジア語、ナウア語、イロコイ語族、カド語族、アルゴンキン語族、アイヌ語、チュクチ語］とともに、抱合語のタイプにいれることはおそらく適切ではない。しかし、上代のたとえば万葉集にみる、「目守ル、足掻ク、胸分ク、腋挟ム、腹バフ、羽含ム、裏恋フ：島伝フ、磯隠ル、天離ル、天霧ル、末枯ル、甦ル（黄泉返ル）：占問フ、神下ス、神葬リ葬ル」などは、その連濁や被覆形からするならば、たんなる語連接ではなく、名詞抱合による語形成がなにがしかの生産性をもっていた可能性を示唆するのかもしれない。　宮岡（二〇〇二、九二頁）

名詞と動詞の複合については、阪倉（一九六六）でも触れられているが、何を複合の基準とするかが曖昧であり、「複合語とみるべきかいなかの判断にくるしむものがおほい」（四四二頁）としている。[1] その点で、宮岡（二〇〇二）は連濁や被覆形をその根拠としており、複合の基準としてより客観的であると言える。しかし、上代語は万葉仮名で書かれ、連濁や被覆形は一字一音表記とその清濁の書き分けに依存しているので、実際上代語においてどの程度抱合が生産的に起こっていたかを調べるためには、音仮名表記に基づいた調査が必須である。そこで、本稿では、上代日本語に見られる名詞抱合について、基礎的なデータを提供することをまず目的とする。その上で、それらについて、現在も話される抱合語の特徴から、若干の分析を加えたい。

二　データ

名詞が動詞に抱合されている、と認定する基準として、本稿でも宮岡（二〇〇二）に従い、A、動詞語頭に連濁が見られる、B、名詞が被覆形となっている、を考える。さらに本稿では、C、名詞が複合語前項にしか見られず、独立して用いられる交替形があるものも、用例として集めた。[2] Aは清濁の書き分けのあるもの（濁音と分かるもの）、B・Cは音仮名表記により、母音交替など語形が明らかである例を採取した。ただし、交替形が明らかでないもの、動詞が連用形派生名詞になっているものは除いた。前者の代表例としては、「た走り（多婆之里）」（萬4298）、「さ遠み（佐杼抱美）」（萬3426）などの接頭辞がある。これらは、抱合からある種の文法化によって形成された可能性もあるが、対応する独立用法が想定できないため、対象としなかった。[3] 動詞派生名詞は動詞の段階で名詞を抱合し、その後に派生名詞となった可能性もあるが、複合以前に派生名詞化し、名詞と名詞の複合となっている可能性が排除できないため除いた。たとえば現代日本語の

「フェンス越しに」や「モップ掛けする」などは、名詞と名詞（連用形派生名詞）の複合と見られる。(4)

以上を、『萬葉集』『古事記』『日本書紀』『琴歌譜』『歌経標式』を用いて調査した例を以下に挙げる。(5)

A　動詞語頭に連濁が起きているもの（動詞の五十音順）

くもがくる／雲隠る（久母我久理［萬4011］）
こぬれがくる／木末隠る（許奴礼我久利弖［萬827］）
やまがくる／山隠る（也麻我久礼奴流［萬3692］、弥野磨我倶利底［紀86］）
しまがくる／島隠る（思麻我久流［萬3597］、夜蘇之麻我久里［萬3613］）
まつがへる／末反る（麻追我敝里［萬4014］）
はぐくむ／羽ぐくむ（羽具久美母知弖［萬3579］）
はぐくもる／羽ぐくもる（羽具久毛流［萬3578］）
いはぐくる／石ぐくる（伊波具久留［萬3554］）
うのはなぐたす／卯の花朽たす（宇乃花具多思［萬1899］）
うませぐす／馬柵越す（宇麻勢胡之［萬3537］）
あさぎりごもる／朝霧籠もる（安左宜理其問理［萬3665］）
みづくへごもる／水漬く辺籠もる（瀰逗矩陛御暮梨［紀95］）
つまごもる／妻籠もる（逗摩御慕屢［紀94］）
やまごもる／山籠もる（夜麻碁母礼流［記30］）
いへざかる／家離る（伊弊社可利伊摩須［萬794］）
しなざかる／科離る（之奈射可流［萬3969］、之奈射可流［萬4071］）
やふじまる／八節縛る（夜布士麻理［記109］）
はなちる／花散る（播奈治流等吉尓［萬4092］、波奈治良布［萬3448］）
ひとでらふ／人衒ふ（比登涅羅賦［紀79］）
したでる／下照る（之多泥流尓波尓［萬4059］）
ひでる／日照る（阿佐比能比伝流美夜［記99］）
ことどふ／言問ふ（伊母尓許等杼比［萬3510］）
なつそびく／夏麻引く（奈都素妣久［萬3348］、奈都蘇妣久［萬3381］）
こころびく／心引く（己許呂妣吉［萬3536］）
さをびく／さ緒引く（左乎妣吉［萬3536］）
すそびく／裾引く（安可毛須蘇妣伎［萬3973］、多麻毛須蘇婢久［萬4452］）
みをびく／水脈引く（美乎妣伎由氣婆［萬3627］）
もびく／裳引く（毛婢伎奈良之思［萬4491］）
あさびらく／朝開く（安佐妣良伎［萬3595］、安佐妣良伎［萬4065］、他萬4408）

B　名詞が被覆形になっているもの（名詞の五十音順）

あまかける／天翔る（阿麻賀氣利［萬894］）
あまくだる／天下る（安麻久太利［萬4094］）
あまごもる／雨篭る（安麻其毛理［萬3782］）
あまざかる／天離る（阿麻社迦留［萬880］、安麻射可流［萬

3608]、他萬3698、3948、3949、3957、3962、3973、3978、4000、4008、4011、4019、4082、4113、紀３）

あまだむ／天飛む（阿摩儛霧［紀71］、阿麻陀牟［記82］、他記83）

あまてる／天照る（安麻弖流月波［萬3650］、安麻泥良須［萬4125］）

あまとぶ／天飛ぶ（阿摩等夫夜［萬876］、安麻等夫也［萬3676］、他記84）

あまゆく／天行く（阿麻由倶都紀乎［歌式ゥ］）

かむさぶ／神さぶ（可武佐備伊麻須［萬813］、可牟佐飛仁家里［萬867］、他萬3621、3660、4003、4046）

かむほく／神壽く（加牟菩岐［記39］、訶武保枳［紀32］、他琴歌譜19）

かむほさく／神ほさく（加武保佐枳保佐枳枳［紀１83ペ］）

こだる／木垂る（許太流木乎［萬3433］）

さかみづく／酒漬く（佐可弥豆伎伊麻須［萬4059］、左加美都伎［萬4116］、他記101）

たにぎる／手握る（多尓伎利物知提［萬804］、多尓藝利母多之［萬4465］）

たばさむ／手挟む（多婆左美蘇倍弖［萬4465］）

たをる／手折る（多乎利加射志弖［萬8336］、多乎里家流［萬3943］、他萬886、4111、4318）

たづくる／手作る（拖豆矩梨［紀106］、安由比多豆久利［萬4008］）

たひろかす／手ひろかす（陀毗盧箇須［紀１187ペ］）

たたなむ／楯並む（多多那米弖［記14］、哆哆奈梅弖［紀12］）

ふなあまる／舟余る（布那阿麻理［記85］、布儺阿摩利［紀70］）

ふなかざる／舟飾る（布奈可射里［萬4329］）

ふなぎほふ／舟競ふ（布奈藝保布［萬4462］）

ふなのる／舟乗る（布奈能里弖［萬4381］）

ふなよそふ／舟装ふ（布奈与曽比［萬4365］、布奈餘曽比［萬4383］）

C

まもる／目守る（麻毛良比［記14］）

むなみる／胸見る（牟那美流［記４］、記４に他二例）

むなわく／胸分く（牟奈和氣由加牟［萬4320］）

その他前項が複合語にしか用いられないもの(6)

あがく／足掻く（足母阿賀迦邇［記288ペ］）

あなゆむ／足悩む（安奈由牟古麻能［萬3533］）

うながける／項掛ける（宇奈我既里［萬4125］、宇那賀気理弖［記90ペ］）

うなかぶす／項傾す（宇那加夫斯［記４］）

うなくだる／海下る（于那倶娜梨［紀120］）

よこさる／横去る（余許佐良布［記42］）

よこなまる／横訛る（与許奈磨盧［紀１199ペ］）

次は、述語が形容詞の例。

A　形容詞語頭に連濁が起きているもの(7)

こころがなし／心悲し（許己呂我奈之久［萬3639］）
はまぎよし／浜清し（波麻藝欲伎［萬3632］）
こころぐし／心ぐし（意具美［萬3057］、情具之［萬3978］）
めぐし／眼ぐし（眼具之毛奈之尓［萬3978］）
かぐはし／香妙し（香具播之美［萬4111］、可具波志伎［萬4371］、他紀35、萬4500）
はなぐはし／花妙し（波那具波辞［紀67］）
いへごひし／家恋し（伊敝胡悲之伎尓［萬3641］）
やまだかし／山高し（椰摩娜箇弥［紀69］）
いへどほし／家遠し（伊敝杼保久之弖［萬3715］）
いろぶかし／色深し（伊呂夫可久［萬4424］）

B　名詞が被覆形になっているもの（名詞の五十音順）

ほなし／火無し（褒那之阿餓利［紀1 413ページ］）

以上が調査で得られた全例である。

三　分析

三・一　意味役割

Mithun（1984）によると、抱合される名詞の意味役割は、もっとも多いのが受動者（patient）であり、次いで道具もしくは場所であるという。そして、一節でも触れたように、動作主が抱合されることはないとされている。しかし、宮岡（二〇〇二）では、上代語に動作主である「神」を抱合した例が見られるとする。本節では、以上で集めた用例をもとに、動作主の抱合について検討する。

神―　宮岡（二〇〇二）が指摘した、動作主の抱合の例「神掃ふ」には、「神」が被覆形「かむ」で読まれる確例は存在しない。「神」を抱合した確実な例として見られるのは、「かむさぶ」「かむほく」「かむほさく」の三例である。

このうち、「かむさぶ」は、神々しいといった意味であり、「神」が動作主であるわけではない。たとえば「山斎（しま）の木立も神さびにけり」（萬867）では、「木立」の様子を表している。「さぶ」は「名詞に接してそれらしく振舞う・それらしく見えるの意を表す」（『時代別国語大辞典』）とされ、ここでの「かむさぶ」は、「神のように（古色を帯びて）見える」という意味だと考えられる。このように「神のように」「神らしく」といった意味に解される名詞の意味役割を、ここでは「比喩」と呼んでおくことにする。

他方、「かむほく」「かむほさく」の「神」は、一見「ほく」「ほさく」の動作主が抱合されている例と解釈される。しかし、これらも「かむさぶ」同様、「神らしく」といった「比喩」を表しているとも考えられる。次に、これらが使用されている文脈を示す。

（1）a　少名御神の　神寿（ほ）き　寿き狂ほし　豊寿き　寿き廻し　記39・紀32

b 中臣が遠祖天児屋命、則ち以ちて神祝(ほさ)き祝きき　紀1 83ペ

「ほく」「ほさく」は、「祈る」「祝い言を述べる」という意味を持つが、（1a）では、「神寿き」と「豊寿き」が対句として用いられており、「豊寿き」が祝い言の豊かさを形容するのに対し、「神寿き」はその神々しさを形容していると解釈するのが自然である。また、（1a）は「少名御神」、（1b）は「天児屋命」とそれぞれ別に主語（動作主）が用いられており、抱合された名詞を動作主と考える必要はない。

舟競ふ　「ふなぎほふ（舟競ふ）」（萬4462）は、新全集で「舟が漕ぎ競う」と訳され、だとすると、動作主の抱合の例である可能性がある。「競ふ」は「古のますらおのこの相競ひ」（萬1801）のように意志的動作主を主語に持ち、時に「月に競ひあへむかも」（萬302）のように対象を目的語に持つ。しかし、「大宮人は舟並めて朝川渡り舟競ひ［舟競］夕川渡る」（萬36）のような例では、「大宮人」という主語が別に明示され、舟は道具として解釈する方が自然である。新大系では、4462の「舟競ふ」も「競うように舟を漕いでいる」と目的語で訳しており、だとすると、動作主の確例とは言えない。

妻籠る　「妻籠る」（紀94）の「妻」は、文法的には「籠る」の主語であり、前例のように「比喩」や「道具」とは解釈できない。意味役割として可能性があるのは「動作主」か「対象」であり、それを決めるのは、「籠る」が非能格自動詞か非対格自動詞かである（Baker 1988、影山一九九三参照）。この判断は、「妻籠る」という用例だけを見ていては難しいが、「妻籠めに」（紀1）という対応する他動詞の形があることがヒントになる。一般に意味役割は、自他の対応があれば、他動詞の目的語と、対応する自動詞の主語は、同じ意味役割を与えられる（Baker 1988）ので、「妻籠る」の「妻」も「妻籠めに」の「妻」同様、「対象」が与えられることになる。

人でらふ　これも前例同様名詞が主語の例である。「てらふ」は「みせびらかす。ひけらかす」（『時代別国語大辞典』）といった意味で、直感的には非意志的な名詞句は主語になれないように思われる。「てらふ」と関連付けられる「てらはす」の例では、「賤人…売レ経、衒弖良吉弖売以告之言」（『日本霊異記』中一九）と「賤人」は動作主と解される。よって、この例は動作主を抱合した例と考えるのが自然であろう。ただ、思い起こされるのは、名詞と動詞派生名詞の複合において、たとえば「人笑へ」「人笑はれ」のような動作主が複合語を作る例が中古では見られることである。ここで、「人」という同じ名詞が複合していることは、偶然ではないだろう。どのような場合に動作主の抱合（複合）が可能になるのか、今後検討したい。

以上、動作主を抱合していると見られる例を検討した。ここでの検討から明らかなように、意味役割の分類は、微妙な解釈の問題を含み、必ずしも自明であるわけではない。以下にはそれを承知の上で、参考のために、名詞の持つ意味役割の数値を、異なり

数で示しておく。なお、本節「かむほく」以下で検討した例を「動作主?」とし、「場所」は「動作の行なわれる場所」、「経路」は「移動する場所」、「対象」は「動作の働きかける相手」といった意味で用いる。

動作主?	対象	経路	場所	道具	方向	比喩	その他
5	27	6	10	9	2	2	6

三・二　生産性

一節で引用したように、宮岡（二〇〇二）は、上代語において、抱合という操作が「生産性」を持っていた可能性があると考えている。しかし、現代日本語においても、名詞と動詞からなる動詞は見られないわけではない。たとえば、影山（一九九三）では、以下のような動詞がその例として挙げられている（アクセントのみによって複合語とされるものは除外し、連濁等が見られるものを挙げる）。

（2）旅立つ、巣立つ、波立つ、泡立つ、色付く、色気づく、名付ける、力づける、手間取る、陣取る、息詰まる、目覚める、身構える、爪弾く

では、どのような点において上代語は抱合が生産的であると言えるのだろうか。ここでは、以下四つに分けて、上代語の抱合の生産性について検討する。

用例数　まず上代語の抱合の生産性を示す現象として、その用例の多さが挙げられる。影山（一九九三）に挙げられた用例数は、一五例なのに対し、上代語で名詞と動詞の複合だけで六三のパタンが見られる。そのうち、『萬葉集』に見られるのは四二パタン七八例であるが、『萬葉集』では、ほぼ仮名書きの巻五、一四、一五、一七、一八、二〇（一一二五首、音節数約四四〇〇）が調査対象になっているので、そのコーパスの規模から考えると、かなり多くの例が見られることが分かる。

しかし、その一方で、表現には固定化している傾向も見られる。同じく『萬葉集』の仮名書の巻の延べ用例数は七八例であり、それに対する異なり数の数値（四二）が高くないことが分かる。Baayen (1992) では、孤例を述べ用例数で割った数値を生産性を示す指標としているが、一回きりしか出てこない例が二九例で、生産性は0.3718になる。この数値は、コーパスが小さければ大きい値を示すことが期待されるので、上代語（特に和歌）において、抱合の生産性が高いとは言えないかもしれない。

構成性　現代語の動詞と名詞の複合動詞には、意味の変化・固定化が見られる。「旅立つ」「巣立つ」は比喩的に用いられ、「色付く」は実際に「色が付く」ことを言わない（服にペンキが付いて「#服が色づいた。」）。他に、「力付ける」「陣取る」「息詰まる」なども、名詞の意味内容が複合語の中にそのまま反映していなくてもよい（数人で腰をかければ「陣」を作らなくても「陣取る」と言える）。（2）には挙げていないが、「鞭打つ」「銘打つ」

「竿さす」「骨折る」などの連濁が見られない複合語も同様の傾向を持つ。

上代語の抱合にも同様のことが言える語もあるが、多くは元の意味を保存していると思われる。「羽ぐくむ」（羽で包む）は大切にすることの比喩であり、「羽」がある必要はない。前節で取り上げた「かむさぶ」の「かむ―」、枕詞で使用される「天さかる」、「目守る」の「ま」、二節には取り上げなかった「た―」のような接頭辞などは意味が抽象化していると考えられるが、他は、大凡名詞の意味をそのまま保存している。(8)

項の充足　動詞がその項を抱合する場合、元の動詞が他動詞や三項動詞だと、結合価を一つ減らしても、依然主格や対格を持つことができる。しかし、元の動詞が自動詞（一項動詞）の場合、主格の名詞を抱合すると、項がなくなる。このことは、現代語の複合の場合には問題になる。現代語の場合、〇項動詞（「文」相当の動詞）を作ることはできないからである。そこで、現代語で自動詞が主格を複合しても、それは依然として自動詞であり、「波立つ」や「泡立つ」は、「何か」が「波立つ」「泡立つ」ことを言うという直感がある（影山一九九三、二一八頁）。しかし、上代語には、用例は少ないものの、以下のように抱合後にさらに項が必要には思われない例がある。

(3) a 花ぢらふこの向つ峰の乎那の峰のひじに付くまで君が歳もがも　萬3448

b ひとりのみ着寝る衣の紐解かば誰かも結はむ家どほくして　萬3715

c 花ぐはし櫻の愛でこと愛でば早くは愛でず我が愛づる子ら　紀67

d 春日の春日を過ぎ妻ごもる小佐保を過ぎ玉笥には飯さへ盛り　紀94

このことは、上代語の複合が現代語のそれと異なる性質を持っていたことを示唆する。影山（一九九三）では、名詞と動詞が統語的に複合される場合は、現代語でも項が残らなくてもよいことを主張している。ただし、影山（一九九三）の言う統語的な複合（4・2「S構造複合」参照）は、アクセント核が一つにまとまらず、結果、連濁も起こらないので、これが上代語の複合と同じものとは必ずしも言えない。しかし、項構造の変化に関わる操作が統語的な操作に近いならば、上の現象は、統語論が語彙論より生産的であるという意味で、上代語の抱合の生産性を示すと言えるだろう。

句の抱合　影山（一九九三）では、複合が統語的である根拠として、他に、複合語の前項が句となることを挙げている。たとえば、(2) は語彙レベルで複合が起こっているため、前項だけを句によって修飾することができない（*[白い波]立つ、*[祖父の名]付けるvs[白い波]が立つ、[祖父の名]を付ける）。一方、上代語にもほとんど名詞だけを句が修飾した例はないが、『萬葉集』3665番歌「暁の朝霧ごもり」はその例であると思われる。(9) とすると、抱合は統語的なレベルで起こっており、よって、

生産的であると言える。(10)

四　関連する現象―結論に代えて―

本稿では、上代日本語の抱合の基礎的なデータを提示し、名詞の意味役割が問題となる例の検討と、抱合が生産的であったと考えられる根拠の提示を行った。最後に、これまでには取り上げなかったが、抱合と関連すると思われる現象について触れ、結論としたい。

二節では、Cとして、名詞が複合語中にしか用いられない例を挙げた。これらは、国語学では「形状言」と言われ、名詞や副詞などと異なり、独立して使われることのない（つまり句を作れない）要素である（蜂矢一九九六参照）。それらは接尾辞を伴って、形容詞や副詞となるか、単独で用いられた場合は複合語となっていると考えられる。だとすると、「形状言」に形容詞や副詞が対応すると考えられる次のような例は、副詞的要素の抱合と見なすことができるだろう（以下「形状言」の認定には蜂矢（一九九六）を参照している）。

(4)　ただむかふ（直向ふ、萬3627）、さはまく（多巻く、記23、紀20）、ちかづく（近付く、萬887、3606、3999、4042、4464）、ふとしる（太知る、萬4465、記84、110、118）、たかひかる（高光る、記28、72、99、100、102）、たかゆく（高行く、記67）、たかしる（高知る、記84ぺ）、さやしく（清敷く、記19）、いたなく（甚泣く、記82、紀71）、はやぐふ（早食ふ、記96、紀75）

しかし、「形状言」には、次のような独立した対応形を持たないものも含まれ、独立形を持たないために、これらは定義的に抱合とは言えない（ここは語形のみを挙げる）。

(5)　もろ―（諸向く）、いや―（いや離る）、かた―（片敷く）、しば―（数鳴く）、たな―（棚引く）、との―（との曇る）、とよ―（豊寿く）、うた―（うた楽し）

さらに、川端（一九七八）では、ここに挙げたものだけではなく、名詞の被覆形もこれらと同様の形状言と捉えられ、名詞の被覆形を含む形状言は「属性的一般」を表すとされる。しかし、「属性的一般」を表すことが、複合語中に用いられることを論理的に含意するわけではなく、川端（一九七八）の指摘は、現象的には、基本的に複合語中でのみ見られる語形を集めたにすぎない。複合の現象を明らかにするために、「形状言」の観察は重要ではあるが、それらだけでなく、本稿でみたように、連濁を含めた複合の現象を広く観察しなければならないだろう。

注

(1)　阪倉（一九六六）では、複合語を調べる資料として『萬葉集』と『日本書紀』の古訓を用いているが、古訓から連濁の有無を判断することはできない。

(2)　これは、川端（一九七八）によって、広義に被覆形と呼ばれているものである。本稿で「被覆形」は、有坂（一九四四）による a・u・o と i・e との母音交替による被覆形を指す用語として用

いる。

（3）固有名詞に見られる例も、今回は対象から除いた。

（4）「つまごめに（妻籠めに、記1、紀1）」の「籠め」は連用形派生名詞ではないかもしれないが、助詞ニが続くものは便宜的に連用形派生名詞とし、ここには含めなかった。

（5）底本は使用テキストを参照。『日本書紀』の訓注は、森（一九九一）の「作業用原本」を参考にした。／萬葉仮名の清濁については、『時代別国語大辞典　上代編』の「主要万葉仮名一覧表」を基にした。／掲出箇所について。Aに当てはまるものでも、Bもしくは Cに当てはまるならばそちらに挙げ、Aには連濁によってのみ抱合を判断できるものを挙げた。／歌は歌番号を「222」と、本文中の訓は底本分冊数と頁数を「1 222ぺ」（一巻二二二頁）と示した。『歌経標式』は歌番号がないため、ページ数を示した。／なおこの他、続日本紀歌謡、風土記歌謡、仏足石歌（日本古典文学大系『古代歌謡集』）を調査したが、確例は見られなかった。

（6）Cに挙げたものは、『時代別国語大辞典』で、形状言とされているもの、また、複合語中にしか用いられないとされているものである。ただし、管見の限り指摘を見ないが、日本語では数詞は分類詞を伴ってしか用いられないので、数詞のみで用いられている「ふたゆく」「ももつたふ」などの「ふた（二）」「もも（百）」なども形状言と考えられる可能性がある。しかし、同辞典に指摘がないため、リストからは除いた。なお、以下に挙げる用例の独立形は次のものが想定される。あ—あし（阿斯、記35）、うな—うなじ（宇奈自、『新撰字鏡』）、うな—うみ（宇美、記13）、よこ—よこさ（与己佐、萬4132）

（7）「うらがなし（うら悲し）」の「うら」は「心」という意味を持つ「裏」という名詞形があるとも考えられるが、接頭語化していると見なし、挙げなかった。連濁している例は、萬3500、3584、3752、記110、紀77に見られる。

（8）元の意味を保存していると解釈される名詞の一覧を一応挙げておく。「家」「手」「木末」「卯の花」「夏麻」「木」「花」「息」「言」「足」「緒」「馬柵」「石」「朝」「島」「水脈」「朝霧」「山」「雨」「裾」「雲」「末」「下」「酒」「舟」「裳」「胸」「山」「妻」「水漬く辺」「端」「浜」「香」「項」「日」「人」「端」「海」「火」「足」。

（9）他に句が名詞だけを修飾している可能性がある例として「ひさかたの天照る月は」（萬3650）、「紅の赤裳裾引き」（萬3973）、「橘の花散るときに」（萬4092）などがあるが、いずれも問題がある。「ひさかたの」は枕詞であり、枕詞の係り先が構造に敏感である保証はない。「紅の」は「赤裳」だけに係り「赤裳」は包合されていない（抱合されているのは「裾」だけで、「裳裾」という語はあるがここの「赤裳」は「裾」と別の単語となっている）可能性が高い。「橘の」は属格と解釈するのが注釈書で一般的であるが、主格と解釈できる可能性も残っている。その場合「花」のみが包合されている。他方、動詞と形容詞の複合の可能性があるため上の用例には入れていないが、「家にある妹し思ひがなしも」（萬3686）という例では、「思ひ」が派生名詞化して抱合されたものならば、句の抱合の例になる。

（10）ただし、繰り返すが、上代語の抱合がS構造複合であるとは考えにくい。影山（一九九三）では、S構造複合は名詞句の意味役割が対象以外の場合には起こらないとしているが、三・二で見たように、上代語の名詞抱合では名詞句は様々な意味役割を持つ。具体的に抱合がどのようなレベルで起こっているかについては、未決定にしておく。

使用テキスト

『萬葉集』塙書房（西本願寺本）、『新編日本古典文学全集　古事記』

（真福寺本）、『新編日本古典文学全集　日本書紀』（寛文九年本）、「琴歌譜」『日本古典文学大系　古代歌謡集』、「歌経標式」『日本歌学大系第一巻』（竹柏本・東京国立博物館本による校訂本）、『新編日本古典文学全集　日本霊異記』（真福寺本、群書類従本訓）、『天治本　新撰字鏡』（京都大学文学部国語学国文学研究室編、臨川書店）

参考文献

有坂秀世（一九四四）『国語音韻史の研究』明世堂書店
影山太郎（一九九三）『文法と語形成』ひつじ書房
川端善明（一九七八）『活用の研究Ⅱ』大修館書店
阪倉篤義（一九六六）『語構成の研究』角川書店
蜂矢真郷（一九九六）「語構成と形状言」『語文』六五、三―一三頁、大阪大学国語国文学会
宮岡伯人（二〇〇二）『「語」とは何か―エスキモー語から日本語をみる―』三省堂
森博達（一九九一）『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店
Baayen, R Harald (1992) Quantitative Aspects of Morphological Productivity. *Yearbook of Morphology 1991*. 109–149. Kluwer Publisher.
Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. The University of Chicago Press.
Baker, Mark (2001) *The Atoms of Language: The Mind's Hidden Rules of Grammar*. Basic Books.［『言語レシピ：多様性にひそむ普遍性をもとめて』郡司隆男訳、岩波書店］
Mithun, Marianne (1984) The Evolution of Noun Incorporation. *Language* 60–4: 847–894.
Sapir, Edward (1911) The Problem of Noun Incorporation in American Languages. *American Anthropologist* n.s. 13: 250–82.

謝辞

犬飼隆先生には、草稿を一読いただき、貴重な助言をいただきました。また、山村祐樹氏の指摘により、データの誤りを一部訂正することができました。記して感謝申し上げます。

（きぬはた・ともひで　本学大学院助教）